

## 「初めに言があった」

「初めに言があった。」(ヨハネによる福音書 1:1)

私たちの神は言葉をもってこの世界を始められました。「光あれ」(創世記 1:3)と言われた時に光が誕生しました。しかもそれは、一方的に語りかけられるだけではありません。神は人と対話してその思いを伝えてこられました。例えば、ノアやアブラハムやモーセは神と対話しながら、神の思いに聞き、神と共に歩んだと聖書に記されています。

その後、「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られた」(ヘブライ人への手紙 1:1)とあるように、預言者に言葉を、思いを託して人々に言葉を伝え続けられました。しかし、人間は聞きたい時にだけ耳を傾け、目に見えないからと神の言葉をないがしろにしてしまうことも多くありました。

そこで神は、言葉を具現化することにされました。それが、クリスマスの物語です。ヨハネによる福音書にとってクリスマスとは、単に救い主が生まれたというだけに留まらず、神の言葉が、神の思いが具体的な形を持ってこの地上に来られたことを意味しています。イエスの一挙手一投足は神の思いそのもののなのです(「この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました。」ヘブライ人への手紙 1:2)。

そしてイエスも言葉を大切にされました。この世界で片隅に迫いやられている人たちのところへ近づいていって、声をかけられました。人間的な思いが先行している際には、きちんと神の思いを具現化されました。だから、イエスの言葉は相手を叩きのめすための武器ではありません。一見すると相手をやり込めているように見える場面でも、イエスの言葉は相手を傷つけるためではなく、全ての命を生かすために発せられているのです。

何とかして相手をやっつけて、少しでも相手よりも上に立つことばかりが強調される現代。物理的な暴力に頼る場面も増えています。そればかりか、言葉も暴力として用いられることさえあります。

「論破」というやり方は、相手の言うことを何も聞かなくて良いからとても便利ですが、その言葉は相手を傷つけるだけで何の成長も生みません。

そのような中であって互いに聞き、互いに言葉を交わすという「対話」をすることのなんと難しいことかと思えます。言語化や発話することは決して「楽」な行為ではありません。まず自分の考え、相手に伝えたいことを明確にして、それを言語に落とし込んで、しかも相手に伝わるレベルの言葉に翻訳して、その上で相手に聴こえるタイミングで伝えないとなりません。そして、それだけ頑張っても、必ずしもちゃんと「伝わる」とは限りません。相手が何かに夢中になって聞いていなければ、聞くまで何度も言わないといけません。相手が誤解すれば、いちいち誤解の元を確認してそれを正さないといけないのです。

「会話」や「対話」することは本当に大変です。それでも、私たちは「対話」することを通して命を生かす言葉を伝え続けたい。イエスがそのようにされたように、私たちも喜びの言葉を語り続けたい。「すべての王よ、今や目覚めよ。地を治める者よ、諭しを受けよ」(詩編 2:10)と詩人が歌うように、全ての者が神の平和を目指すように呼びかけたいのです。

それは「労多くして功少なし」と人に言われるような働きかもしれません。それでも、イザヤは「いかに美しいことか／山々を歩き巡り、良い知らせを伝える者の足は」(イザヤ書 52:7)と、あちこち駆けずり回り、傷つき、泥だらけの足こそが美しいと言っています。命の言葉を伝え続けることこそが美しい歩みなのです。

「初めに言があった」。命を紡ぐ言葉、命を生かす言葉、命を支える言葉が今、私たちのところへ来られました。このクリスマスから、私たちもまた、その命を隣人に伝える一人になっていくのです。

